

崇禪寺伝来墨跡

保存修理の技がつなぐ文化財



保存修理によってわかったこと



夢窓国師墨跡「果山」— 本紙の材質

修理の際、本紙の材質を知るため、紙質の観察調査と繊維組成試験が行われました。その結果、「果山」の本紙は、竹を原料とする「竹紙」と判明しました。この当時の竹紙は、基本的に中国から輸入されたものだったと考えられます。高僧夢窓国師が果山禅師へ贈る書をしたための紙には、格式高い舶来品が選ばれたことがうかがえます。

竹紙は光沢感が美しい紙ですが、国産の楮紙と比べると繊維が短く折れやすいため、とても脆弱な材質です。今回の修理を困難にした要因は、本紙の材質によることも大きかったといえます。



「果山」本紙の顕微鏡画像
撮影：(一社)国宝修理装演師連盟

繊維組成試験にて撮影。顕微鏡による繊維観察によって竹繊維と判定された
分析：高知県立紙産業技術センター

此山妙在墨跡 — 書状から掛軸へ、改変の痕跡

此山妙在の本紙は繊維が短く切れていたため、繊維組成試験だけでは判定が難しく、紙質の観察調査を含め総合的にみて「楮紙」だろうと判断されました。楮紙は楮の樹皮の繊維を原料とする手漉きの紙で、古くから日本国内で生産されてきたものです。

また、本紙が非常に薄く厚みにムラがあったことから、折り畳まれた書状が後世に掛軸へと仕立て直され、その際、巻く形状とするには紙が厚すぎたため、裏を剥いで薄くする「相剥ぎ」という行為が行われたことが推察されました。夢窓国師と並び立つ高僧だった此山妙在が果山禅師と領主明智氏に対し送った書状は、後世に寺宝とされ、掛軸へと姿を変え大切に伝えられてきたことがうかがえます。



「此山妙在」墨跡本紙の顕微鏡画像
撮影：(株)坂田墨珠堂

繊維組成試験では楮の特徴に近いが、断定できないとされた
分析：高知県立紙産業技術センター

崇禪寺の2幅の墨跡



木造果山禅師坐像
崇禪寺開山堂に安置される

鎌倉時代から室町時代にかけて美濃国を本拠とした武士土岐氏は、鎌倉時代末～南北朝時代の三傑とされる高僧夢窓国師、仏徳禅師、此山妙在を美濃地方へと招き、禅宗普及の礎を築きました。

土岐氏の庶流「土岐明智氏」を興し、妻木を本拠とした明智頼重もまた、妻木に禅宗寺院「崇禪寺」を創建し、仏徳禅師の弟子である果山禅師を住持に招きました。

崇禪寺に伝わる夢窓国師墨跡「果山」は、崇禪寺開創を祝して夢窓から果山へ贈られた書とされます。一方、康安2年(1362)の日付が入る此山妙在墨跡は、果山と明智浄皎(初代頼重の弟頼高)のもとに感謝し、此山妙在から送られた書状で、崇禪寺の壮麗さを讃えた詩が記されています。



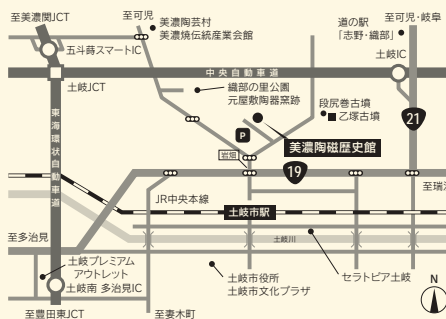
本事業は公益財団法人住友財団の助成により実施しています。 [展示協力] 株式会社坂田墨珠堂 崇禪寺

同時開催 開館44年収集の軌跡Ⅱ『現代の作り手たち』会場:土岐市美濃陶磁歴史館(第1展示室)

土岐市美濃陶磁歴史館 TOKI CITY HISTORICAL MUSEUM OF MINO CERAMICS

〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻1263 TEL.0572-55-1245 FAX.0572-55-1246
土岐市文化振興事業団ホームページ <http://www.toki-bunka.or.jp/history>

交通のご案内 [鉄道] 名古屋駅からJR中央本線「土岐市駅」下車 徒歩約10分
[自動車] ●中央自動車道「土岐IC」から約7分 ●東海環状自動車道「五斗橋スマートIC」から約5分 ●東海環状自動車道「土岐南多治見IC」から約10分



2023 11.1 [水] → 12.10 [日]

【会場】土岐市美濃陶磁歴史館 第1展示室
【開館時間】午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)
【休館日】月曜日・祝日の翌日(ただし11/4は開館)
【入館料】[一般]200円(150円) [大学生]100円(70円) [高校生以下]無料
*()内は20名以上の団体料金
*障がい者手帳(デジタル可):医療受給者証(指定難病・小児慢性特定疾病)をお持ちの方と介助者1名無料
企画:公益財団法人土岐市文化振興事業団

写真:上ー 夢窓国師墨跡「果山」14世紀 岐阜県重要文化財 令和4年度保存修理
下ー 此山妙在墨跡 康安2年(1362) 岐阜県重要文化財 令和3年度保存修理

土岐市美濃陶磁歴史館

TOKI CITY HISTORICAL MUSEUM OF MINO CERAMICS

SPECIAL EVENT

関連イベント

EVENT 1 ナイトミュージアム 保存修理担当者によるスライドレクチャー

講師:(株)坂田墨珠堂 佐味義之氏(装演師)
日時:令和5年11月11日(土)18:30～19:30 ※受付18:00～
会場:土岐市美濃陶磁歴史館 第1展示室
定員:20名(事前申込制、要入館料) ※当日入館券半券持参で再入館可

EVENT 2 トークセッション『地域の文化財をつなぐ』at 崇禪寺

出演:三輪嘉六氏(元九州国立博物館館長) 坂田雅之氏((株)坂田墨珠堂 取締役会長)
進行:春日美海(土岐市美濃陶磁歴史館学芸員)
会場:崇禪寺本堂(土岐市妻木町55-1)
日時:令和5年11月18日(土)13:30～15:30 ※受付13:00～
定員:70名(事前申込制、参加費無料)

【申込方法】メール toki_museum@toki-bunka.or.jp または電話0572-55-1245にて
※参加者全員の氏名、代表者電話番号、居住地町村名を明記 10月11日(水)より受付開始、先着順

崇禪寺の文化財修理

岐阜県土岐市妻木町にある臨済宗妙心寺派の古刹崇禪寺は、土岐明智氏初代頼重が虎溪山永保寺三世果山禪師を招き、文和3年（1354）に創建したと伝わります。寺には、創建の頃よりおよそ700年の間、修理を重ねながら守り伝えられてきた墨跡2幅「此山妙在墨跡」および夢窓国師墨跡「果山」（いずれも岐阜県重要文化財）があります。近年、それらの傷みがひどくなっていたため、令和3～4年度に住友財団および岐阜県、土岐市の助成・補助により保存修理が行われました。このたび、保存修理が完了した墨跡2幅を公開すると同時に、修理の過程や成果をご紹介します。

文化財修理の担い手「装演師」

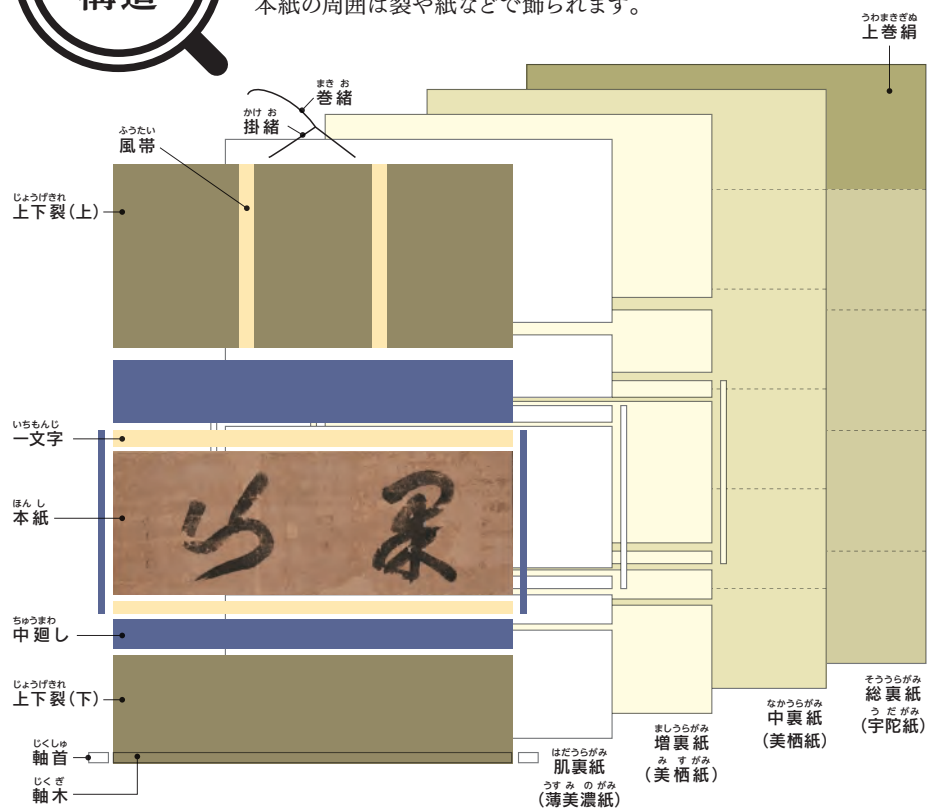
書画や古文書など、絹や紙を中心とする素材で構成された文化財を「装演」文化財といい、掛軸や屏風、冊子などの装丁に仕立てられています。脆弱な素材で作られた文化財を将来にわたって受け継ぐためには定期的な修理が重要で、それらの保存修理を担う技術者を「装演師」といいます。現代の装演師は伝統的な技術を基礎としつつ、科学的な知見も取り入れながら文化財修理を担っています。崇禪寺の2幅の墨跡も装演師により保存修理が行われました。

文化財の保存修理の考え方

過去から受け継いだバトンを未来へと受け渡す脆弱な素材の文化財に手を入れる保存修理は、現状維持を基本に、過去から受け継いだ文化財を安全に将来に託すという考えのもとに行われます。文化財としての価値が損なわれないように、過剰な修理を避け、再度修理が可能な材料と技術で行われることが原則です。また、後世の修理に備え、修理の記録を残すことも重要です。

掛軸の構造

本紙の裏に何層もの裏打ち紙がつけられる構造です。本紙の周囲は裂や紙などで飾られます。



裏打ちには手漉き和紙が使用され、層によって用いられる紙の種類は異なります。修理のための材料や道具を制作する技術も「選定保存技術」として認定、保護されています。

今回の修理について

今回の修理は2幅とも傷みが激しく、表装を全てばらす本格解体修理が行われました。事前調査によって立てた方針に基づき、何層にも重なった裏打ち紙や過去の補修紙の除去が慎重に行われ、修理後に再び表装し直されました。

修理工程

- 1 調査
- 2 解体
- 3 洗浄
- 4 剥落止め
- 5 旧裏打ち紙の除去
- 6 旧肌裏紙・補修紙の除去
- 7 新たな補修
- 8 新たな裏打ち
- 9 補彩
- 10 仕立て

此山妙在墨跡の修理

令和3年度 保存修理

此山妙在墨跡
康安2年（1362）

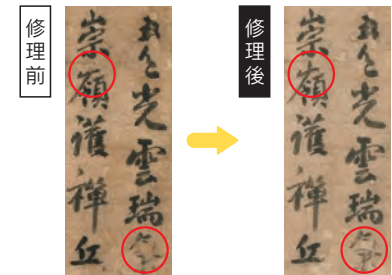
修理前



修理後



修理前の本紙は非常に薄く、厚みにムラがあり、穴の空いた部分に多くの補修紙が補填された状態でした。今回の修理では、旧補修紙を全て除去し、欠損箇所には新たな補修紙を補填しました。古い裏打ち紙をめくる過程で、本紙の一部が裏側に折り込まれた状態で裏打ちされていた箇所が見つかりました。今回、それらを表に返したことにより、隠れていた墨書が現れ、読めるようになった箇所があります。



赤丸は、修理後に墨書が読めるようになった箇所



掛軸の解体作業



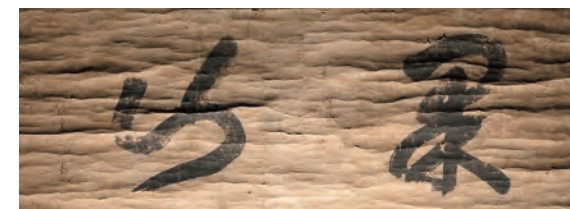
補修紙を補填した箇所に彩色し、周囲となじませる「補彩」の作業



新たな裏打ちの作業（増裏打ちの様子）

夢窓国師墨跡「果山」の修理

令和4年度 保存修理



修理前の斜光撮影
折れや亀裂による表面の凹凸が著しい。



本紙の欠損箇所を赤色で示した図
本紙と補修紙を明確に見分けることが非常に困難だった。



本紙に表打ちを施す様子。

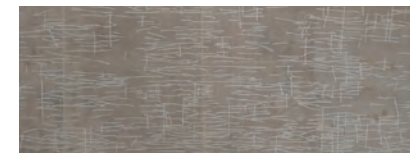


旧補修紙をピンセットで除去する。



欠損箇所に新たに補修紙を補填する。

折れ伏せ



旧中裏紙全体に施された折れ伏せ
—過去の修理の痕跡



元の折れ伏せを全て除去する作業。
今回は、本紙修理後に、新たな折れ伏せを施した。

掛軸を巻いたり広げたりを繰り返すことにより横皺ができることを「折れが生じる」といい、折れはやがて亀裂などの傷に進行する。それを防ぐ方法として、「折れ伏せ」という修理がある。折れた箇所の裏面から、細い帯状の紙を糊で一本ずつ貼り付け補強する作業である。



夢窓国師墨跡「果山」
南北朝時代（14世紀）

修理後

脆弱な本紙表側の全面にフノリ液で養生紙を貼付けて固定する「表打ち」を行って乾かした後、裏返して旧肌裏紙と旧補修紙の除去を行っていった。フノリ液は、海藻を原料とする伝統的な素材で作業後に取り除くことができる。